

全ての教科を通して、「育成したい資質・能力」を育むために

No.98でもお知らせしましたが、置賜教育事務所「『考える力』を育む授業づくり研究会」では、4教科12名の教科研究員の先生方とともに、「置賜で育成したい資質・能力」について協議し、全ての教科で「課題解決の過程において、つなげて考え、根拠を明確にして表現する力」を育成していくことを目指し、各教科チームで研究を進めてきました。

2月に行われた全体会において、教科研究員が上記の資質・能力の育成を目指して日々取り組んできたことについて共有しました。各学校において、全ての教科・領域を通して「育成したい資質・能力」を育てていくためのヒントとして、ご活用ください。

教科研究員の先生方の取り組みから学ぶ

「課題解決の過程において、つなげて考え、根拠を明確にして表現する力」を育成していくために、教科横断的な視点を大切にしたい取り組みや工夫



【小学校の教科研究員の取り組み】 全ての教科を受け持つ強みを生かして…

- ・ 普段の授業で、子供達が根拠をもとに対話することができるような授業を意図的に行ってきた。
- ・ 「つなげて考える」ことを重視した。そのために、前学年や前時の学びを意識した導入を心がけ、子供の学びの連続性を大切に、興味・関心が高まるよう工夫した。
- ・ 社会では…算数では…音楽では…学活では… と、その教科の特性に合わせながら「根拠をもとに表現する」取り組みを意識してきた。
- ・ 表現力を高めるには、双方向に伝え合うことが大切である。そのために「相手を意識して」発表すること・聞くことを大切にしてきた。→ 聞き手を育てることが話し手を育てることもつながる。
- ・ 自分の考えをより適切に表現できるように、子供達の語彙を増やすことを大切に考えてきた。
- ・ 教師も子供も、学ばせたいこと（学びたいこと）と学習活動とが一致するように単元をデザインすることが、「つなげて考える力」につながる。

教科の専門家として、また、複数クラスで実践できる強みを生かして…

【中学校の教科研究員の取り組み】

- ・ 「つなげて考える」「根拠を明確に表現する」ためには、前時までの学習を理解していることや、学びの履歴がノートに残っていることが大事である。
→それがはっきり残っていることで、自信を持って取り組むことができる。
- ・ 学んだことを、日常場面や生活、身の回りの物や現象等につなぐことを大切にしてきた。
→子供の「そうか！そういうことだったんだ！」の納得・理解を大切に。
- ・ 子供達自らが考え表現していくように、個々の子供の考えを引き出せるような視点の与え方を工夫してきた。
- ・ 課題設定を「根拠を明らかにする」としていくことで、根拠となる図形の性質の学び直しの機会にすることができた。学び合う場面での「お互いの考えの根拠を大事にする交流」にもつながった。
→式に使われている数値や記号、演算に着目し、それらと図・既習事項の性質をつなぎながら根拠を明らかにしていく思考過程は、「数学的な見方・考え方」の伸長を図る上でも有効であった。



<2/2 1 県探究型推進協議会における山形大学 学術研究院 野口 徹 教授の話より>

- ◎カリキュラム・マネジメントの充実のためには「ア 児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握すること(総則小P39中P40)」がスタートとなる。まず、子供の姿をとらえ、学びの履歴を知ることが大事。
- ◎「教科横断的な視点を大事にしたカリキュラム・マネジメント」は、教科横断的な視点に立って「資質・能力」を育成するということである。単元配列表を作成することありきではない。

授業づくりで大切にしたいポイント

各教科チームでまとめた「授業づくりのポイント」です。それぞれの教科の授業で大切にしたいポイントが詰まっておりますので、今後の授業づくりの参考にしてください。

小学校 国語

教科研究員 鳶田妃佳里（米沢市立塩井小学校）
川村 千穂（小国町立叶水小学校）
小口 和香（白鷹町立東根小学校）

- 付けたい力を絞り込み、子供自身が「何を学んだのか」を自覚できるようにすることで、教師も子供も言葉の力の高まりを実感できるようにする。
- 「何を伝えたいのか」「誰に伝えるのか」という目的意識・相手意識を持つことで、根拠を明確にして表現することに必然性を持たせる。
- 小集団交流で言葉の意味や働き、使い方を文脈に沿って捉え直したり、振り返りでさらに問い直したりすることで、言葉を通して考える力を付けていく。



小学校 社会

教科研究員 中川 陽介（南陽市立梨郷小学校）
佐藤 祐貴（南陽市立赤湯小学校）
小関健太郎（高畠町立糠野目小学校）

- 資料提示の工夫により実生活と学びをつなぎ、子供が単元を通し自分事として学習を進めることができるようにする。
- 社会的事象への子供たちの気付きや疑問をもとに、協働的に課題をつくったり、追究したりする経験を重視し、課題解決のためのスキルも身に付くよう意識する。
- 子供が社会的事象同士をつなげて考えること（比較、分類、統合、関連付け等）ができるよう意図し、具体的な根拠とともに自分の考えを表現し合う場を設ける。



中学校 数学

教科研究員 大沼 建（米沢市立第三中学校）
石黒 修平（米沢市立第五中学校）
淀野千賀子（南陽市立赤湯中学校）

- 既存の問題を「育てたい資質・能力」という視点で捉え直し、課題設定及び学習過程を工夫する。
- 図・式・グラフなどを使って「数学的に表現する活動」と図・式・グラフなどで「数学的に表現されたものを読み取る活動」の双方を複数の単元でバランスよく取り入れることで数学的な表現力の育成を目指す。
- 「根拠を明確にして説明する」「根拠を問い直す」など根拠を大事にした学習を構想し、繰り返していくことで、根拠となる基礎的・基本的な知識・技能の確かな理解と定着につなげる。



中学校 理科

教科研究員 和地奈々江（米沢市立第七中学校）
室岡 貴翔（長井市立長井北中学校）
石黒 良幸（南陽市立宮内中学校）

- 日常生活と理科の学習内容の関連付けを図り、身の回りの出来事について科学的な視点や考えを持たせることで、興味関心を高める。
- 既習事項や生活経験をもとにした予想を立て、観察・実験を行い、科学的な根拠を示した考察を行う授業構成を大切にする。
- 図に表す活動を取り入れたり、キーワードを提示したりして、理科の用語を適切に用いて、自分の考えを表現できるようにする。



今年度の取組みの成果を「実践記録集」としてまとめ、置賜教育事務所HP
【<http://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/706003/>】にアップします。
教科研究員の先生方の実践（指導案等）も掲載しますので、ぜひご覧ください！